

物事を絵や図のように表した象形文字と指事文字

すでに述べたように、最初は丸暗記でどんどん漢字を覚えていた幼児も、五歳くらいになって理屈で物事を考える左脳が発達しはじめると、蟻や蟬など虫の仲間には“虫”、鳩や鶏など鳥の仲間には“鳥”という共通の字がついていることに自然と目が行くようになります。

また「じゃあ、どうして“雀”や“雉”には“鳥”の字がついていないの？」とか、“黒”や“燃”の字の下についている点々には、どんな意味があるの？」など、漢字に対してさまざまな疑問や興味を抱くようになります。

お子さんがそうした時期にさしかかったら、少しずつ漢字の成り立ち、すなわち、その漢字がどのようにしてできたのかを、漢字辞典などを使って親子で一緒に調べてみるといいでしょう。“山”や“川”という漢字が、実物の山や川の形をかたどって作られたいわゆる象形文字であることはよく知られていますが、それ以外に、顔の部分の名称「目、口、耳」や「牛、馬、鳥、魚、虫」などの動物、そして「日、月、木、火、水、雨、門、田」などの漢字もすべて象形文字です。

こうした幼児にとっても身近な漢字が、もともとは実物を絵で表したものだたとわかれると、それだけでワクワクするような楽しさがありますし、成り立ちを知ることで、一つひとつの漢字の意味がより生きいきとイメージできるようなのです。

また、この象形文字とよく似たものに、指事文字と呼ばれるものが

あります。数字の「一、二、三……」や「上、下、本、末」などがこれにあたり、象形文字が形のあるものを絵のように表しているのに対し、指事文字は目に見えないもの、形のないものを図や記号のように表現しています。

漢字の意味からするとやや抽象的になりますが、象形文字と同じように視覚的なイメージで捉えることができるので、幼児にも十分理解できるはずです。